この冊子は平成 28 年度　林野庁の森林・山村
多面的機能発揮対策交付金事業により作成しました。

平成 29 年 3 月

監　修　武田義明　前迫ゆり
ご協力　さともり活動組織のみなさま

大阪さともり地域協議会事務局
（公益財団法人大阪みどりのトラスト協会内）
〒559-0034 大阪市住之江区南港北 2-1-10　ATC ビル ITM 棟 11F 西
TEL 06-6115-6512　FAX 06-6115-6524
satomori@ogtrust.jp
http://www.ogtrust.jp/satomori/

地域の自然を未来につなぐ

― さともり活動と地域の豊かさ ―

「人と自然の共生」とはなんだろうか。持続可能な社会をめざすために私たちにできることはなんだろうか。

農耕が始まったおよそ１万年前、人々は水を求めて河川流域に集い、森林から食料を得、家や道具をつくるために木を伐りだしていたであろう。まさに生物資源を活用し、自然の恵みを得ながら暮らしていたと想像する。

伊藤若冲が描く身近な自然には多様な生きものが集っている。東海道五十三次のマツ林、摂津名所絵図の松茸狩りなど、1700 年代～1800 年代に描かれた絵図から、当時の森林はもとより、人々が自然を楽しみ、愛しんでいたようすをも伺い知ることができる。

この自然の豊かさを次の世代にもつなぎたい。そんな思いがさともり活動の原動力なのかもしれない。平成 25 年度から交付されている林野庁の交付金は人をつなぎ、自然を豊かにすることにおおいに役立っている。これからも国、自治体そして地域に暮らす人々がつながり、大阪の里山が多様な生きものを育みながら、ほっこり和む森林として息づくことが、未来への架け橋になるだろう。

大阪さともり地域協議会副会長
大阪産業大学大学院教授
前迫ゆり

環境保全のための持続可能な里山管理について

コラム対談

武田先生　森谷氏

2016年11月24日(木)の見学行程

AM 高槻市梶原地区(竹林見学)

PM 能勢さとやま創造館(クヌギ林・菊炭窯見学)

森林山村交付金制度の活用開始から3年が経過し、改めて交付金にこめた思いや展望をうかがいたいと思います。

交付金事業からの卒業

事務局　この交付金がはじまって3年が経過しました。林野庁からは同じ活動組織が継続して交付金を受けるのはどうか。交付金からの自立をとの言葉が最近強くなってきました。自立という言葉は現場を見ていて厳しいと感じています。卒業といった表現はどうでしょうか。

森谷　活動をはじめるにあたってソフトもハードも準備が必要なのに資金が全くなしでは困ってしまいます。例えば、活動に必要な道具も買い揃えないと、また、地域のなかで段取りもしないとなど整えないと、これらには、活動を始める際の第一歩を踏み出す資金として必要だろうということもあって、このような自由度の高い交付金をつくりました。3年が経ち、そろそろ事業の成果を示していかなければなりません。ずっと続く補助金はありませんから。ただ、「自立」っていう言葉は厳しい言葉ですね。「卒業」という言葉でいいと思います。行政はいろいろなところにいろんな人に税金を還元していかなくてはならない立場なので、一定の期間とか一定の成果を出して「卒業」を促すことは必要だと思います。

里山をいちど整備して終わりにしないために

森谷　今回の交付金について言えば、「山を整備しておしまい」というのであれば、従来型のボランテイアでやってもらった方がいいかもしれません。この交付金では、交付金活動をきっかけに地域を活性化したいとか、自分たちの生きる糧を少しでもいいから加えたいとか、そういった思いを現実のものにしてほしいという思いがこの予算には込められています。薪や竹・タケノコなどの販売だったり、地域でつくるジビエ料理だったり、自分たちがやってみたいことや、地域外の人達と交流をする橋渡しの予算にもなってほしいのです。地域にリピーターさんが増えたりと、もう一度人が集まるようになってくれればというのが、この交付金の一番の成果となります。それが「卒業」のひとつの形かもしれないですね。一番いいのは、里山の資源を活用した生業(なりわい)のひとつにしてもらって、自分たちでその資金を回して、その山を繰り返し使ってくれることです。もしくは、先に紹介していただいた竹林のように、竹林の元々の所有者さんにもう一度育てる意欲を起こさせてくれたり、蘇った竹林を高齢の自分(所有者)に代わって事業者に貸してもいいよねとか、そうなってくれたら地域の山は生き返って、また人が集まるのではないでしょうか。

武田　ただやっぱり、NPOで里山を管理しているような場所では、なりわいを目的にしてやっているわけではなくて、生物多様性や環境保全を目的にしているところは結構あるんですよ。ある植物や生き物の保全を目指した活動。そうなると、ある程度補助金がないと全部自腹というのはちょっと大変です。

森谷　そういう意図はしっかり入っていると思っています。環境教育的な活動を行う団体はもちろん、公募対象に入っています。必ずしも生業だけを目指した交付金ではありません。例えば「間伐」という言葉が一般の方々に普通に理解してもらえるようになるまで数十年かかりました。私が30年前にこの仕事に就いたばかりの頃、現場で間伐をしていると、近くを通ったハイカーの人に、「あなたたちは、せっかく植えた木をなぜ伐るのか？」と問われたりもしました。最近では「間伐？ああ山のためにいいんだよね。」と言われることが随分と増えました。これからは、この交付金も使って、「里山」を人が利用し尽くしてはじめて「里山」らしさを維持できることを伝えていっていただけたらと考えています。

武田　確かにそうですね。

里山を伐って新たな成果に結びつける

森谷　「里山」は人が伐って、使って維持してきた、人が作った森です。武田先生がおっしゃるように環境教育であるとか、この交付金で新しい使い方をしていかないと里山がなくなってしまいます。利用しないでいると、里山は荒れ、災害がすぐ起きてしまうような森になってしまいます。そうなると治山事業、砂防事業で国土を守るためにやむなく構造物を入れていくしかなくなってしまいます。そうならないように、この交付金をうまく活用してほしいという思いがあります。

武田　ただ、地域によってかなり事情は違うと思いますが。

森谷　地域によって差はあれ、どういう形にしろ、うまくいった事例を全国的に紹介していく必要があると思います。「あの地域が出来るのなら、うちだって出来るよね」となってもらいたいですし、間伐する、苗木を植えるに加えて、生業にならなかったとしても、様々な使い途があるじゃないかと、今度は別のことにトライしてみようというきっかけになればと考えています。森にあるものは何でも使い倒すという考え方でないと、「里山」は維持できないのではないかと思います。

森は、住宅の柱に使う木材としてだけでなく、燃料用の薪として、蝶やカブトムシの産地としてなど、アイディア次第だと思います。今の世は、スギを50年かけて育てても、必ずしも採算が取れる山ばかりではないので。

武田　一方で大阪なんかでは伐ること景観が変わって「なんで伐るんや！」と問題になるようなこともあります。地域の中で全体のコンセプトや合意を調整しないと伐れないところもありますね。

事務局　生業に結びついた事例を何か教えていただけますか？

森谷　森林からサカキを採取してうまく市場に出している人もいます。サカキは、需要があるのに、持ちの良い国産は流通量が不足しているので、いい値で取引されると聞いています。ほかにも、様々な森林由来の産物の中からそういうニッチを見つけて敏感に反応する地域があって、そこがトップシェアを持っていたりします。

武田　特にサカキは日本の暖温帯ならどこででも栽培できる種ですし。それでも地域によってかなり事情は違うと思います。大阪近辺では生産より環境教育とか環境保全とかの要素が大きいんです。

森谷　好事例の紹介はこれまでも林野庁ＨＰでも進めています。地域特性もいろいろあると思いますが、従来型の「伐る」、「植える」ことにプラスして、切り捨てた木材（間伐材）の使い道や別の利用法など、次のトライのきっかけを求めている人は多くなっていると思います。

次のフェーズの担い手は

武田　もともとボランティアでずっとやっていたところは、多少交付金が切れてもある程度の期間、保全活動は続くと思っています。

森谷　午前中に現地を案内いただいた竹林整備の現場では、請け負った森林組合の方も言っていました。自分たちは委託を受けてやらざるを得ない部分もあって、資金のある３年間はどうにかもとの竹林として使えるところまではやりました、と。でも、それ以降は資

金が尽きてしまう。地主さんと話しをして、地主さんが改めてそこを継続して運営するということは自身の年齢や

後継者の問題もあってなかなか難しいというのが現実です。では誰かやってくれる人を紹介しますよ、という中継ぎを森林組合の方が担っている。そして地域のNPOがバトンタッチを受けて、次のフェーズに入っていくという結果でした。今回のケースでは、森林組合のスタッフの方々がそういう自発的意思を持ってバトンの受け手を探してくれたことがとても良い結果を生むことになりました。

事務局　バトンの受け手が現れたことは成果と言えます。だけど、そういう成果って実は見せにくいなあと感じています。

森谷　初期の段階では山の状態が良くなること、それが第一の成果です。次のステップでは、それを受け継いで育ててくれる人の出現や、所有者さんが意欲を出して自分でやるようになりましたということが成果だと思います。この交付金の目的は、「地産地消」＋「地産外消」なんです。つまり、外から入ってくるものに金を払うことを少なくすることが地域経済にとってはいいわけです。例えば、ガソリンは地域では生産できないので地域外から買うしかありません。お金が出て行く一方です。一方、薪などは長距離の運搬には向かない素材ですから、概ね自分たちの近隣地域で作ったものを地場で消費をすることになります。だから、薪とか炭が地域経済にとっていいよと言うのは、エネルギーを自分でまかなえるからであって、炭を焼く人、それを配達する人、使う人、そのお金が地域でまわるので、地域経済の効果としては非常に高いものではないかと考えています。実は森の中の産物にこそ、そういった可能性が隠れているような気がしています。確かに成果を出すことは難しいですし、今話したように単純ではないと思います。成功している地域は、いきなり採算がとれるようになった訳ではなく、相当の苦労の後に結果を出しているのではないかと思います。

事務局　大阪の場合、NPOとか団体がだいたい約40あるんですが年に１回くらい交流会的なことをやっていて、お互いに活動を応援に行くなどの交流ができてきています。これは非常に良かったです。

森谷　そういうネットワークができているというのは、先ほど例示したような成功例へ導くためにも、とても有効だと思います。

武田　同じ地域でも、隣でやっていたのに初めてお会いしたとかね。あと、いろんな環境保全のスタイルをやっているところもあるし、どういう植物が増えたとか、こういう種を保存できたというのは一つの成果じゃないかと思いますけどね。

森谷　もちろんそのとおりです。生態系が戻ってきたという意味ではすばらしい成果だと思います。

数値にできない成果でも
地域の未来につながるものを。

森谷　成果については、数値化しなくていいものもあるのではないかという気がしています。例えば、手入れされた里山は子供の遊び場としても使われます。「森の幼稚園」をご存じでしょうか。ドイツなどで盛んだと聞いていますし、日本でも取組が始まっています。森を園舎の代わりにして森の匂いであるとか、見るもの、場合によっては食べるものなど、五感に訴える教育です。最初はNPOからスタートしているところが多いと聞いています。

武田　うちの近くには紫金山公園っていうのがあるんですけど、そこは幼稚園の子供を連れてきて、どんぐり拾いさせたり、中には林の中に入らせたりするところもあります。

森谷　小学生を持つ家庭の親子キャンプを自治体が主催をしてるところに、NPOが入って案内してくれたりする事例は、私自身体験しています。その時は、普段、現代の子供たちには縁遠くなった体験、例えばツルを山に行って取ってきて、それを帰ってきてリースにするというもの。普通はリースの材料ってテーブルに準備されて始められます。それを山に採りにいくところからやる。現地は結構急な斜面でしたが、探検ごっこのようで、子供達がとても喜んでいたすがたが今も印象に残っています。

武田　森の幼稚園もそうですし、既存の保育園、幼稚園で野外活動をやりたいと思っていても、それを相談しに行く人がＮＰＯにいるかいないか。そこも一つ次のステップへの課題なのかなと。里山をそういう目的に合うような整備をしておかないといけないと思います。

森谷　そういう環境を整えるっていう意味では、成果を数値化しなくてもいいのではないかと思います。

武田　そう、継続性ができるということと、やった結果、どう変わったかという成果を出す必要があると思いますけど。

森谷　この予算を地域活動のツールとして今後とも存続・活用していくためには、成果を全国に向け発信していかなければならないと考えています

#交付金からの卒業

#委託事業 #講座 #炭焼き

#薪づくり #粉炭 #協働事業 #施設運営

1 NPO法人 島本森のクラブ

炭と粉炭の販売で、少しずつでも自己資金をつくる

三島郡島本町で活動する「島本森のクラブ」の拠点「記念の森」には手作りの炭窯があります。ここでは里山林整備で伐採した木竹などを木竹炭に加工し、粉炭として販売しています。自立した活動資金づくりへのチャレンジとして取り組んでいます。農林業祭での出品や町民へのお試し提供などで顧客へアプローチしています。粉炭は田畑の土壌改良にも効果があり、近隣の貸し農園を借りて野菜づくりをしている方の購入などから少しずつ販売先を増やしています。また「記念の森」の枯葉を集めて、そこに「ぬか」を混ぜて醗酵させて、腐葉土に仕上げ、こちらも農林業祭で出品しています。

粉砕機活用による粉炭作り

原料投入口へ固形炭を入れているところ

集塵装置（左側）を付けた時の装置全景

炭焼作業

窯止め・冷却後の完成炭の窯出し

炭材を窯詰め後の「口焚き」状況

木酢液も精製しています。

農林業祭には木酢液や木工クラフトなどを販売

会員の息子さんにネット通販に詳しい方がいるので、今後はネット販売もできるように計画中です

元技術職の八里さんは、経験を活かして設備をグループでつくっています。

ボランティアが主体の里山保全活動を
更に自主自立した活動に移行するには、いくつもの課題があります。
予算の問題、メンバーの確保、活動フィールドと地域との連携など
どれもすぐには解決できない課題ですが、小さな可能性から連携の道を模索し、
チャレンジしている団体もたくさんあります。
たとえば、どんな取り組みが進められているのでしょうか？
３つの事例を紹介します。

2 NPO法人 森林ボランティア トモロス

林業の盛んな河内長野で木馬道作りにチャレンジ

河内長野市は市の総面積の67％が森林です。スタートした平成17年ごろは活動地が少なかったのですが、経験を積んで技術力をアップし、イベントに積極的に参加することで、知名度を上げ、地域の信頼を獲得することに力を注いできました。今では岩湧の森「四季彩館」の運営を担ったり、植樹活動や地域の森の利用提案など行政との協働事業も増えてきました。
河内林業の盛んな土地柄でもあり、かつての出材方法だった木馬道（キンマミチ）作りにチャレンジしたこともあります。出材後の用途は、薪やベンチや丸太階段に活用していますが、多くはありません。これを充実させていくことが、これからのひとつの課題です。
これからはわれわれ市民が主導権を発揮できるようになり、地域で活動地を増やしていきたい。そのためにも小遣いくらいは欲しいなって思うのが正直なところです。最近では「ただでもやるよ」そしてときには勇気をもって「お金下さい」と言うようにしています。それが森林ボランティアとして、末永く地域に貢献することにつながると考えるようになりました。

#交付金からの卒業 #委託事業 #講座 #炭焼き
#薪づくり #粉炭 #協働事業 #施設運営

3

NPO法人
森のプラットフォーム高槻

炭、薪、センター運営 3本柱の事業で活動を安定したものに

炭づくり

さともり事業を活用して炭焼き窯を整備しました。当初は地域の炭焼き名人に指導いただきましたが、2年ほどで一連の工程をNPOのメンバーだけで実施出来るようになりました。この冬期には3回の炭焼きを実施しています。かなり大きな窯で、一度に3トンの炭材を窯詰めし、3昼夜にわたって焼き具合を見守り空気調整をします。1回あたりの出来量はおよそ400〜500キログラム。最近は製品としての歩留まりも安定してきました。主に森林観光センターのバーベキューで活用されています。

薪づくり

薪づくりも活発に行うようになってきました。活動拠点に隣接する森林観光センターや近くのキャンプ場で使用されています。自分たちの山仕事の技量の向上も心がけながら、長年手付かずだった地域の薪炭林の整備場所を開拓することをはじめました。自分たちの活動の広がりが地域の里山に関心を呼び、再生につながるのは嬉しいことです。

木工クラフトセンター

大阪府森林組合から高槻森林センター内の「木工クラフトセンター」の運営を委託されています。地域の里山整備をして集めた素材でのクラフトを大人から子どもまで皆さんに楽しんでいただいています。運営委託費が一定の収入源として確保できますし、会の拠点として活用しながら、アクセサリー掛けや帽子掛けなど、素材を生かしたクラフトメニューを考えたりしています。

＃担い手の交代

＃ひきつぎ　＃次世代交流　＃森林組合の仲介
＃地元組織化　＃スモールビジネス　＃里山産業の継承

里山保全活動を継続した活動にするためには、担い手の育成や交代が欠かせません。
世代交代のヒントにできるモデルケースを紹介します。

ＮＰＯ法人森のプラットフォーム高槻・高槻市中畑地区自治会（里山保全協議会）

森林整備を森林組合からNPO法人へ引き継ぎ、地元自治会と連携

ここで紹介する事例は、さともり事業で大阪府森林組合が森林整備を地元のNPOが引き継ぎ、地区の自治会と連携していく試みです。中畑地区の山はほとんどが人工林です。子どもの頃に親と一緒に植林した経験がある世代が現在60代70代となりましたが、それ以下の世代では森林整備の担い手がおらず、地区の人工林、また田畑周辺の天然林についても、荒れた森林となり獣害被害が多発していました。
そこで新たな試みとして、これまで地区の森林整備を担ってきた森林組合が、里山保全協議会に森のプラットフォーム（森プラ）を紹介し、森プラで森林整備が行えるよう仲介をしました。森プラでは森林整備活動を行いながら、高槻市・森林組合と共催で「市民林業士養成講座」を定期的に開催し、活動メンバーを増やしながら、中畑地区を含めた活動への参加者を育てています。（養成講座は13期開催し約200名が修了）
これらの連携をきっかけに、かつての里山景観を再生し、改めて「活かせる資産」として見直す村づくりの機運が生まれています。

NPOと地域の連携による成果

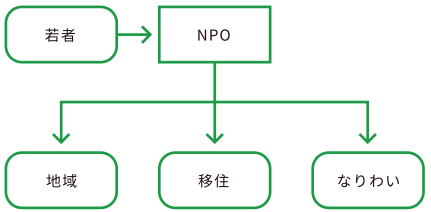
ＮＰＯにとって
- 地域に固定の活動フィールドができる（市民林業士の活躍する場所が生まれる）
- 間伐した木材を薪や炭材として活用し活動資金ができる

地域にとって
- 整備された里山が増え、田畑での獣害が減る
- 地域の若い世代に価値ある資産としての里山を伝え村づくりの意識ができる

ＮＰＯ法人里山倶楽部

若い世代が求めている スモールビジネスや スモールファームのための 経験と担い手技術を里山で提供

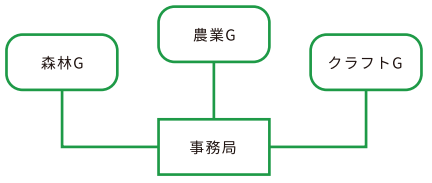
南河内郡を拠点に活動する里山倶楽部は、里山というフィールドを使った企画を考え、若い世代のニーズに沿った活動を「かかわりの入口」としています。たとえば、田舎移住に関心の高い人に向けて、里山倶楽部のフィールドで田舎暮らしを体験してもらうという試みがあります。さらに林業や農業など参加者が興味を持った分野には「木質エネルギーの達人」「無農薬野菜の達人」といった専門の先生が寄り添い、里山の活動をスモールビジネス・スモールファームとして「なりわい」に転換していく方法を指導しています。新しい世代を呼び込むポイントは「自分たちの活動に絶対に留まってもらおうと考えるのではなく、どんどん入ってもらい、どんどん出ていく動きのある組織にする」こと。ここで学び経験を積み、移住先や自分の住む地域での活動に活かすサポートをすることで若い世代の呼び込みにつなげています。



ＮＰＯ法人とどろみの森クラブ

これからの活動をみすえて70代から60代へ理事を交代

とどろみの森クラブは箕面市の北部丘陵地区にあるニュータウン・森町（しんまち）を拠点に活動しています。任意団体の期間を含め十数年の活動歴があります。森林、農業、木工、事務・管理の4グループが渾然一体となり活動しています。松井晃さん（写真左）は、大阪市内在住で7年ほど務めた理事長職を73歳で引退し、地元在住で当時60才台半ばの古賀寛さん（同右）にバトンタッチされました。地域の自然環境に係る活動は地域の人が参画することによって内容が充実し、活発になり、持続性が高まるとの考えから、早期に若い地元の方に委譲したとのことです。
クラブでは、これまでに培ったノウハウを生かし、ニュータウン内の緑地の除草作業の請負や体験農園の設立など、クラブの活動を支える経済面の基盤づくりを進めています。
松井さんはそれにかかわりながらまだまだ頑張ると意気盛んでした。
「僕はクラブの中ではまだ新米、皆さんに担がれる神輿だと思っています」という新理事長の古賀さんについて、松井さんは「自然に対する憧憬が強く勉強熱心な方です。新たな展開に向けてのこれからが楽しみです」と期待されていました。



＃女性の活躍

＃草木染め　＃学びながらやってみる　＃男性も一緒に
＃小商い　＃地元の素材　＃交流の多様化　＃次世代

クリ、クスノキ、
ムラサキシキブ、
ヤシャブシが材料

高槻里山ネットワーク

草木の色で染める、てづくり女子会

平成25年頃から、女子会活動を始めて
20名以上が参加しています。
里山整備をしていても、伐採雑木を
積み重ね土にするだけ。昔の人なら他にどんな使い方を？
と思い草木染めをすることに。
素材は原則として施業場の里山、竹林で採れるもので。
男性会員の協力も得て採取しています。
また、色にアクセントをつけるべく、
ときには菜園で育てた花、野菜も使います。
メンバーは、そんな色に魅せられ里山、竹林の整備にも意気揚々です。
正月に使うウラジロ、ベニシダからも意外な色が。
公民館での半日の染め会では、
自然界と人々のコミュニケーションの場として、
新しい素材、色、作品を求めて毎回試行錯誤しています。

結び目は
輪ゴムより、糸で

素材集め

高槻市
楊梅山周辺にて

ヒノキの葉っぱくださ〜い。皮もくださ〜い。

山のめぐみをいただきます。

こんなところから色がでます。

シルクは60度、
麻・木綿はちょっと高い
温度がいいのよ

手拭いの
板締め、絞り染め

どんな色ができるか
見本で確認

じゃーん、
今日は
こんな模様に
なりました

こっちに小さいヤマモモあったよね。

通りにじゃまになる枝を切ります。

ウラジロはこのまま持って帰りましょう。

この日
採取した素材

・ヒノキ　・ヤマモモ
・カワラタケ　・ウラジロ
・ソヨゴ

＃生物多様性に向けて

＃ヒメボタル　＃竹林整備　＃モニタリング　＃獣害対策　＃植生保護　＃地域の理解

千里第4緑地
植生管理活動組織

竹林整備で、ヒメボタルの里を守る

武田先生

吹田市は緑地と呼ばれている所が8.3％程度の都市です。千里ニュータウン造成時に新旧市街地の景観の落差を緩衝するための「緩衝緑地」として残したのが「千里第4緑地」で、かつては雑木林が多く、陸生のヒメボタルの生息地です。

竹の雑木林への侵入が激しくなり、雑木林を主な棲息域にするヒメボタルをはじめ、緑地の生物多様性が維持できなくなることに危機を感じていました。平成19年からＮＰＯ法人吹田みどりの会として活動をはじめ、数が回復したヒメボタルは行政への働きかけで平成23年に吹田市の天然記念物になりました。

都市近郊の里山保全活動には、独特の苦労があります。刈払い機の音がうるさい、除伐によって日当たりや風向きが変わるなど。その他、ヒメボタルのシーズンには多くの人が見学に来られるようになりましたが、車や人の整理などまでも、我々が始末しないといけません。千里ニュータウンも高齢化が進み、住民の多くが「静かに暮らしたい」と何より願っている様子です。行政にも生物多様性条例の制定などで活動の背景をサポートして欲しいと願っている昨今です。

特定の種の保全

里山で特定の種を保全する場合はその種の生活史や環境を知る必要があります。千里第4緑地ではヒメボタルの保全を行っていますが、ヒメボタルの幼虫が何を食べ、いつ成虫になるか、気温が何度になったら羽化するかなど調査し、さらに、成虫が発する光の数を10年以上にわたって調査しています。里山管理をする前に比べて確実に数を増やしていますが、昆虫の場合はその年の気候にかなり左右され、変動が大きい場合があります。餌の量によっても変わる可能性があります。そのためには長期にわたるモニタリングが欠かせません。

平成20年夏の観察会

キツネノカミソリ

シカによる食害が多発

ネット補修を行い植生を保護

シカの食害から豊かな植生を守る

茨木市の車作地区はキツネノカミソリが群生しています。車作里山倶楽部は平成17年より地域の里山保全活動をはじめました。日当たりの良くなった谷筋はお盆前には一面にキツネノカミソリが咲き誇るようになりハイカーもたくさん訪れていました。ところが平成24年の夏に花は見る影もなくなりました。シカによる食害が一気に拡大した結果です。そのころより北摂地域では安威川ダム建設や新名神高速の工事が進み、シカの生息域も随分と変わったのではと思われます。キツネノカミソリはヒガンバナ科で球根には毒性があるが、真冬1、2月に発芽する新芽に毒性は有りません。シカにはちょうど食物の無い時期ですから食害に遭うことになります。シカ除けネットの設置などで地域の植生を取り戻す努力を進めていますが、キツネノカミソリの群生地復活の目処は、未だ、たっていません。

車作里山倶楽部

新名神高速建設工事の様子

顔が見える、横のつながりで地域をまもる 2016/9/22大阪さともりネットワークショップを開催

大阪府下では、たくさんの里山保会団体が活動されています。個々の活動を知り、お互いの良いところを学び合うことができれば、里山を通じた地域の未来が見えてくるのではないか。また、お互いが課題に感じていることを相談し合う関係が生まれれば、解決に向けた行動に動きだせるのではないか？そんな、顔が見える横のつながりに期待し、ワークショップを開催しました。

〈日　時〉　平成28年9月22日（木・祝）　13時30分～17時
〈会　場〉　エコプラザ内セミナールーム
〈参加者〉　19団体　36名　懇親会17時～26名

主なワーク内容

❶ グループワーク（団体をシャッフルした3人ひと組による交流と成果について）
❷ 話題共有ワーク（高槻里山ネット・里山倶楽部・みさき里山クラブ・千里第4緑地）
❸ グループワーク（今後やっていきたいこと、課題解決に必要なことについて）

「これからやっていきたいこと」として出た意見より

- 市の全域が市街地、これからも少ない植生の自然を守りたい
- 森林を利用した遊び場づくりや、湿地の回復に取り組みたい
- 間伐による低花木の繁殖と小鳥の飛来に取り組みたい
- チームプレーを心掛け、地域住民との確かな関わりを増やす、流れる水にたとえたらその流れを止めないこと
- 文化財を活かしたＰＲ
- 自然材と人工材の美しさを感じてもらう企画
- 都会のこどもにもっと来山してもらいたい
- お金を稼げる里山活動
- 「森のようちえん」のようなものを始めたい
- 地元の会員を増やしたい
- 若い会員を増やしたい
- 専門分野の後継者づくり
- 地域社会に必要なプラットフォームをつくる
- クラブを知ってもらう講座を開講したい
- 地方自治体をまきこんで活動を広げたい
- ブナを活用したセラピー
- 今後10年間の森林プランを作成中
- 山桜をみに登れるよう整備したい

1
はじめに、このワークの目的をみんなで確認

2
さともりのこれまでの事業報告を武田先生より

3
自己紹介と活動をカードに書いて交流開始

4
ことなる団体から集まった3人で楽しくざっくばらんに

5
参考にできる意見が飛び交い盛り上がった各テーブル

6
里山倶楽部さんからは、若者を呼び込む事業の紹介

大阪さともり地域協議会のあゆみ

立ちあがりのころ

平成25年5月16日　森林・山村多面的機能発揮対策実施要綱
同実施要領　決定
平成25年5月30日　大阪府主催
森林・山村多面的機能発揮対策事業説明会実施
平成25年6月14日　第1回大阪さともり地域協議会
（設立総会）開催
平成25年7月　7日　第1回事業募集説明会開催
平成25年7月12日　第2回事業募集説明会開催
平成25年9月　5日　第3回事業募集説明会開催

実績

平成25年度　交付実績46団体　69,658千円
平成26年度　交付実績67団体　116,360千円
平成27年度　交付実績67団体　112,211千円
※27年度実績額　全国6位
平成28年度　64団体　115,705千円（見込み）

事務局回顧録

平成25年のスタート時は、交付金や助成金の申請がはじめての活動組織が大半でした。申請を書く皆さんも、受けつける事務局も、それは大変でした。どうお話しすれば理解が進むのか、事務局は暗中模索していました。

お金関係以外にも、シンポジウムや現地視察会、講習会など、大阪府内の里山保全活動が活発になることを目指した取り組みをしました。北摂での現地視察会で中南部の方から防鹿柵をはじめて見たとの声があり、せまいと思っていた大阪もところ変わればさまざまな環境があるのだと感じました。

ワークショップや懇親会で互いの顔を知り合った団体同士で、情報交換や作業の委託が始まっています。きれいになった竹林や雑木林に、「近隣の方からお褒めの言葉をいただいた」、「山作業に地域の方が戻ってきた」との声も聞きました。大阪さともり事業が未来につながる成果だと思っています。

現地視察会

シンポジウム

救急法講習会

「さともり」地域の未来へ、いま伝えたい言葉

里山、森、小川、草花、生き物、そして私たちの求める暮らし。
地域の自然と共に生きる未来を次の世代へ引き継いでいくために、
今、私たちが思うこと。今、私たちが出来ること。
大阪府内で活動する様々な活動組織から、
地域の未来へ向けたメッセージをここに書きとめ伝えます。

和泉葛城山ブナ愛樹クラブ活動組織

・7年に一度のブナの豊作に合せ、種を採取・植込み、植栽・移植など行わなければならない！！
・豊作の次年度には道などに生えた実生を畑に植え替え、ブナ樹を増やしたい！！
・豊作の後の6、7年先には檜林に植替え、森林の再生につなげたい！
・ブナ林の再生に伴い、他の山野草も素敵に広がる！皆で頑張ろう！！

森林ボランティアトモロス

みんなで作ろう、みんなの森を
子どもも大人も、地元の人も都会の人も、
多様な人が関わって、ひと・植物・動物
多様ないきものを育む森づくりがしたい。

高槻市梶原地区竹林保全協議会

子、孫に美しい自然、住みよい
自然を残そう！

島本森のクラブ

かけがえのない地球環境を、私たちの手で守りぬこう！！美しい北摂の“青い山脈”・“日本百名水”を次代につなごう！！次世代をになう子ども達への環境教育に力を注ごう！！

車作里山倶楽部

「キツネノカミソリ」の
群生を復活させよう！

くろんど園地さんさくの森つくり隊

里山は、人が紡いできた自然。日々積み重ねられてきた「耕す」ということは、「田に返す」「返し続ける」という営み。光の中に、風の中に、土と水の中に、めぐりめぐるいのちの四季が息づいています。そんな空間があればいい。

うみべの森を育てる会

「明るく　楽しく　無理をせず」
自分が楽しくなければボランティア活動は続かない。リーダーは楽しい雰囲気の作業環境作り（チームワーク）を最優先する。うみべの森は公園の一部なので女性が一人でも安心して散策できる明るい見晴らしの良い海が見える森にすべく努力中。

能勢妙見山ブナ守の会

妙見山の一万年以上続くブナの森を守り、その姿を伝えることは、きっと未来の子どもたちに夢と生きる力を与えると信じます。

里山倶楽部

今、自然とのかかわりを取り戻す、新たなライフスタイルの模索が始まっています。里山的に暮らす、はたらく。里山的に遊ぶ、学ぶ。あなたと里山をつなぐ、あなたらしい“里山的”生き方・暮らし方 を探してみませんか？

茨木市佐保・岩阪地区竹林保全協議会

明るい竹林　残そう　未来の宝島

交野里山ゆうゆう会

交野山の麓から山頂までの里山を地元の幼児～小中学生のこども達が親しめるように竹や木を伐って草を刈ります。一緒に元気で楽しく里山の保全活動をやってみませんか？愉快な仲間が待っています。

茨木市下音羽・長谷地区竹林保全協議会

小さい力　子孫につなごう　地域のみどり！

泉南の自然を愛する会

放置され、荒れた山林を仲間と楽しく整備。子ども達と一緒にヤマザクラ等の植樹。将来、立派なヤマザクラの森が出来、散策に人々が集まり、里山の大切さに気づくはず。

ゆめみヶ丘岸和田まちづくり協議会

かつて広がっていた豊かな里地里山という地域の財産を守り、次世代に受け継いでいけるよう、地域の住民や団体とともにまちづくり活動を進めていきます。

高槻里山ネットワーク

里山は、多様な生物の宝庫、地域の宝箱です。里山を守り育て、次の世代に確実に引き継いでいくことが重要ではないでしょうか。多様な出会い、環境教育、健康の維持・向上の場としても役立ちます。ご一緒に実践しながら考えてみませんか。

みさき里山クラブ

「好きなことをやって　楽しく遊びながらいい森をつくろう！」
①森林保全活動により森が本来持っている機能を発揮させる②自然学習活動＆リクレイションの場の提供③多様な動植物の保存や保全

高槻市中畑地区里山保全協議会

引き継ごう　地域の力で　みどりの楽園！

高槻市二料地区里山保全協議会

引き継ごう　みんなの力で
適切な里山を！

森区山地保全会

「またや見ん交野の御野の桜がり、花の雪散る春の曙」と万葉集に歌われた交野市森区の里山も放置され荒れ果ててしまいましたが、「さともり活動」でパワーを注入、毎年３月に小学生卒業記念植樹会を継続して、次代を担う子供たちの手で桜の植樹を続け、万葉時代の綺麗で安全な里山の復活を目指します。

茨木里山を守る会

森を育て、森を守り、森を楽しむ。未来のために今行動しよう。一人の里山活動は小さなことでも、みんなで動けば森がよみがえる。

枚岡地区鎮守の森づくり実行委員会

自然が豊かになれば、自ずと私たち人も豊かに幸せになれます。先人にならい、海川山草木虫動物を慈しみ、自然に感謝しこれからも、鎮守の森を中心とした豊かな地域づくりに努めていきます。自然と共に、素晴らしい何かを生み出していけるはずです。

里山の順応的管理

里山をどのように管理するのか？

まず、里山をどのようにしたいのか目標を立てる必要があります。ある特定の生物を保全するのか、生物多様性全体を保全するのか、竹林でもタケノコを採るために整備するのか、竹林を駆除し雑木林に変えていくのかというような色々な目標があります。この目標に対して、どのような管理をしていけばよいかを検討する必要があります。そのためには現状がどのような状態に成っているのかを把握する必要があります。同じ場所の里山でも管理する場所が乾いているのか、湿っているのかでも管理方法が異なります。適正な管理をするためにはモニタリングが欠かせません。モニタリングを行うことによって目標に近づいているかどうかを検証することができます。目標に近づいていなければ管理方法を変えるなど対策が必要になります。この様に目標、地域によって管理方法が異なるために、常に林の状態に心を配る必要があるでしょう。

大阪さともり地域協議会会長
神戸大学名誉教授
武田義明